

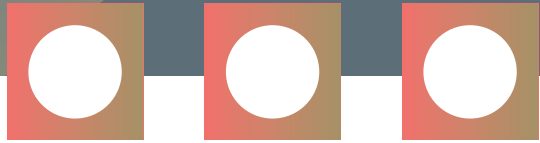
2022年10月15日 | 土 |
13:30~15:30 (開場 13:00)
昭和女子大学世田谷キャンパス
8号館6階 コスモスホール

2022年度

昭和女子大学近代文化研究所主催

公開シンポジウム

今、国会議事堂を読み解く



講師・パネリスト

昭和女子大学元教授・近代文化研究所客員研究員

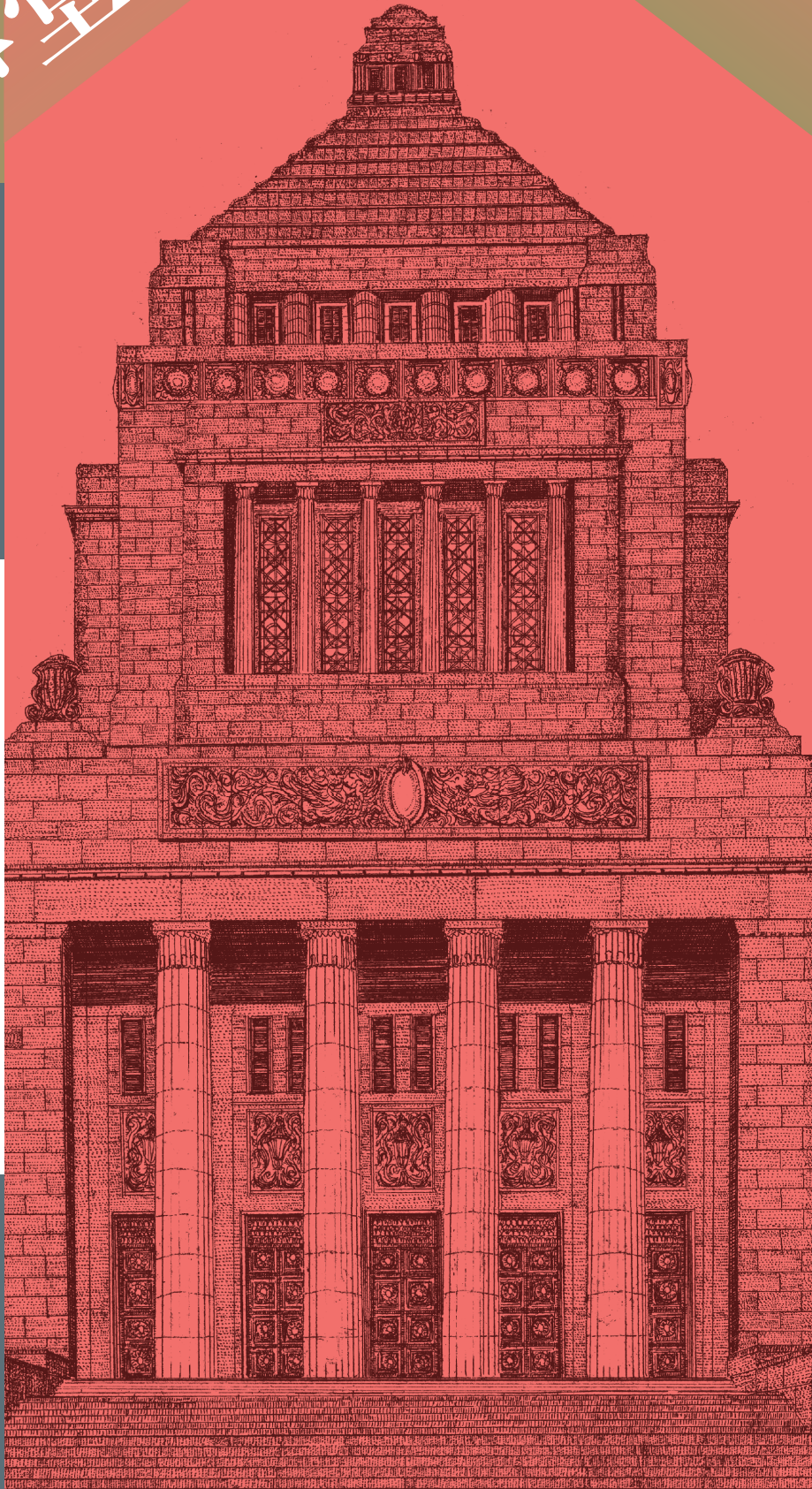
堀内 正昭氏

東京大学先端科学技術研究センターフェロー

御厨 貴氏

慶應義塾大学総合政策学部教授

清水 唯一朗氏



今、国会議事堂を読み解く

19 20年(大正9年)から約17年をかけて1936年(昭和11年)に建設された国会議事堂は、わが国の政治の中核でありながら、その建築の特異な形態は国民に近寄り難い感を抱かせるものではないだろうか。

2021年3月10日に堀内正昭著『ブックレット近代文化研究叢書15 国会議事堂の誕生 —仮議事堂からの5代にわたる建築史(1886~1936)—』を刊行した。当研究所では、この刊行を契機としたシンポジウムを企画し、パネリストと参加者に議論の場を提供し、近くて遠く存在である国会議事堂の姿に迫りたい。

わが国の国会議事堂に直結する建築史は、ドイツのエンデ&ベックマン建築事務所による設計案に遡る(1886~1887年)。しかしながら、同案は予算ならびに工期の問題で実施されず、1890年の第1回帝国議会開催用に、同事務所のシュテークミュラーと吉井茂則(臨時建築局技師)の設計に基づいて、まず仮議事堂が建てられた。仮議事堂とは、恒久的な議事堂が完成するまでの仮の建物という意味であり、現国会議事堂が竣工する1936年まで、そ

の時代は46年間続いた。その間、建物の焼失により2度再建され、日清戦争勃発(1894年)により大本営の移った広島に臨時に建てられたものを含めて、計4棟の仮議事堂が存在した。

国会議事堂の研究は、建築史、都市史の分野のほか、議事堂としての性格上、権力と相関関係があり、政治学からのアプローチがなされている。

例えば、ドイツ型の議場構造とされるひな壇(閣僚席)が採用され、現在まで存続している理由は何か、ドーム型ではなく四角錐の屋根を用いた背景に何があったのか、竣工当時「近世式」とされた外観意匠は今どう評価できるのか、そもそも国会議事堂において、わが国固有のものがあるとしたらそれは何かなど、実に様々な問い掛けができる。

本シンポジウムでは、御厨貴氏に政治の側面から、清水唯一朗氏にはドイツ型議場がなぜ採用されたのか、堀内正昭氏には意匠を中心にそれぞれの見解を述べてもらう。本シンポジウムが新たな読み解き方の契機となり、今後の課題についての提起がなされることを望む。

堀内正昭:国会議事堂議場内の「商業」のレリーフ(銅版、7cm角、2021年制作)



申し込み方法

参加費は無料です。どなたでも奮ってご参加ください。下記①、②のいずれかの方法でお申し込みください。

事前申込制10月13日(木)正午〆切

① Web申し込み:予約フォーム ※右記のQRコードからもアクセスできます。

<https://forms.gle/G8wo6mgkR16m1JoM9>

② Fax

03-3411-4520 ※氏名・連絡先(電話・FAX)・所属をお知らせください。



お問い合わせ先

メール ● kinbun@swu.ac.jp 電話 ● 03-3411-5129 HP ● <https://content.swu.ac.jp/kinbunken-blog/>